千刈狸の呟き

～ 身体の言い分 ～

孫 七 狸

―私はなぜか長時間本屋にいると便意を催します。三島由紀夫著の格調高き文芸書を手にしているときも、高橋春男のマンガを立ち読みしているときも、“それ”は容赦なく私を襲ってくるのです―　35年前の『本の雑誌』に掲載された読者葉書で、投書した20代女性の名前から「青木まりこ現象」という。

まさしく私が20年程前から自覚していたことである。一体どうしてこんなことが起きるのか？原因については実に様々な説があり、ざっくり分ければ匂いなど環境からくる理由か、緊張などの心理的な理由によるらしい。当時はかなりの反響を呼び、同感の声が多数寄せられ、“いま書店界を震憾させる「青木まりこ現象」の謎と真実を追う”というタイトルの特集まで組まれた。当時様々なメディアに取り上げられ、その名は広く認知されるようになったという。

それにしても40年も身体を診る仕事をして今更ながら、どれほど医学が、生命科学が進歩しようと人間の身体はいまだにブラックボックスだと思う。心と身体あるいは脳と身体―そもそも不可分であることは承知の上でこの二つを考えてみる。「身体が資本」とばかりに富の生産に勤しみ、少なからず酷使し続けた結果…中高年に至ってあちこちに故障を抱え、検診を受ければ数多の異常が見つかり、二人に一人は癌になり、果ては流行の感染症にも罹ってしまう身体―もはや人間の身体は富の源というよりもリスクの源になってしまったようだ。生きていることそのものがリスクなのだ。脳は司令塔で身体は兵隊―常に支配され使い走りに甘んじてきた身体にすればリスクとみなされること自体、不本意で立つ瀬が無い。文句のひとつも言いたくなろうというものだ。

「身体尺」というものがある。尺は尺骨のことで前腕の長さ。６尺が１間、約1.8m。建築物をはじめ、生活のあらゆる場面で身体の各サイズを尺度として用いていた。のみならず自らの身体を規矩すなわち行為の規範とみなして、矩を踰えず、は仏道の教えであった。また割に合わないことは「間尺に合わない」と言われた。つまりは身の丈こそ社会の成り立ちの基本であったといえる。

また「間合い」は武道の立ち合いに際しての基本であるが、同時に社会的な距離感を表す言葉であり、１間はまさに巷間いわれるソーシャル・ディスタンスに他ならない。コロナ禍での医療従事者に対する相反する社会の態度（ブルーインパルスまで飛ばしての謝意、一方で誹謗中傷）をある識者は「遠巻きの感謝と近間の不寛容」と絶妙の表現をしていたが、まさに社会的距離感の源は身体であり、身体こそ知性そのものというべきであろう。

私たちはコロナ禍を機会に「身の丈にあった」生きかたというものを考え直してみるのもよいかもしれない。どんなに金があっても、どんなに大食・美食したくても所詮身体一つだけで出来ることには限りがあるし、自らの足で歩いて、見て回れる範囲はたかが知れている。その意味で先般の緊急事態宣言下の各県の対応、例えば県境での検問ならぬ検温などはまるで関所のようで、昔の幕藩制を彷彿させるし、まして国がほぼ鎖国状態になってしまったのも興味深い限りである。これはグローバル化する現代社会への強烈なアンチテーゼにも思える。

私たちはもう少し身体に敬意を払い、身体の声に素直に耳を傾けるべきなのだろう。20代にして自らの不可思議な身体の振る舞い（本屋に行くとウンコしたくなる）に真摯に向き合い、身体の声を聴こうとして勇気ある投書をした青木まりこさんのように。

さて、私のまりこ現象はどうかというと、自粛下にあっても外出のたびに本屋に立ち寄り、あわてて用を足し、これで「不要不急」ではないぞ、などと嘯いていたが、最近は本屋の横を車で通るだけで微妙に便意を催すことがあり、どうやら私の身体は“パブロフの犬”化しつつあるようで、何だか情ない。